

これからの大阪文化

『新修 大阪市史』第9巻、1995年の巻末は、木津川計さんが標題を綴っている。「これからの大阪文化」について木津川さんらしく課題を提起している。それから20数年。大阪はここ10年ほど政治の波に押し流され、文化も逆流しているように感じる。大阪文化の今を考えるうえで示唆に富む、標題を紹介しておきたい。

明治以降、経済一辺倒の都市経営を続けてきた大阪であった。ために長く続いた文化的貧血状態であったのだが、ようやく大阪はその状態から脱却しようとしているのである。文化の都市の課題とは何だろう。文化の拠点施設が建設されねばならない。同時に、いたるところに市民のための小規模施設も建設される。文化の都市は芸術家の要求に応える。個性的でオリジナリティーにあふれる若いアーティストたちが創造的意欲を刺激されるあらゆる手だてが講じられる。市民の文化活動も盛んで、そのための積極的な助長行政が進められねばならない。

近代以降の大阪が初めて迎えた文化を重視する都市目標実現の時代である。もはや、がめつい、ど根性の代名詞で呼ばれる大阪であってはなるまい。「文化にルビをつけるとしたらハニカミである」といったのは太宰治であった。はにかみ、すなわち含羞(がんしゅう)である。遠く元禄の昔、大阪は高い文化の先進都市であった。また再び文化都市、つまりは含羞都市を構築するには、なりふり構わぬ、ではない、なりふり構う都市づくりを展開せねばならないのである。

人間に人格があるように、都市にも都市格がある。日本中から、世界中から魅力あふれる都市と眺められ、高い文化性の故に尊敬される都市、それが21世紀の大阪像であろう。第22代商工会議所会頭に就任した大西正文(大阪ガス会長)は、大阪の都市格、その向上を大商の主目標に掲げ、諸事業を展開しているのである。

大西会頭はその必要条件として次の3点の視点をあげる。(『超・関西宣言—発光する都市のすべて』)。

まず『住みたい街』。一定の定住者を確保しないと都市施設の維持が難しくなり、人間同士のコミュニティも失われる。潤いや安らぎを与える美しい景観も必要だ。次に『活力ある都市』。都市の活力には経済活動が不可欠だが、大阪らしい中小・中堅製造業の活性化を図ることが重要。最後に知的興奮を覚える『知性ある街』。市民が日常生活の中で先人たちの文化遺産に触れ、新しい文化を育てることが求められる。良きマナーや市民意識の向上も大切だ。

経済的疲弊都市は文化的活性都市になりにくい。求められる経済的活力ではあるが、合理的な産業政策にのっとって振興策は打ち立てられねばなるまい。だが、「かつての誇り高い都市文化は明治以降、とりわけ戦後の産業都市化路線を突っ走る中で失った。

産業優先の都市構造からの転換は容易ではなく、文化発信力回復の道は険しい」と日本経済新聞社佐々木俊一編集委員は企画欄「都市」の中で以上のように診断するのである。

(同平成6・10・10)。 ……

都市が人間をつくるのである。がめつい都市ががめつい人間を多く生み出す。木津川計はかつてこう綴った（『含羞都市へ』）。

これからはこう考えよう。人間が都市をつくるのである、と。すると問われるのは人間の質だ。その資質において高い文化性、つまり含羞性を欠落させてはならないのである。再び言う。なりふり構わず、ではない、なりふり構う、それでいてクリスタルな都市構築こそ 21 世紀に向かう大阪の、そして、すべての都市の目標でなければならない。

(2018年9月16日)